

皆さんこんにちは。群馬県高等学校教職員組合執行委員長の澁谷です。

本日は「ぐんま教育のつどい2022」へようこそ。皆さまのご参加を心より歓迎いたします。

今日は大変喜ばしいことに「ぐんま教育のつどい」に初めて参加される方がたくさんいらっしゃいますので、まずは少しばかり、群馬高教組のご紹介をさせていただきたいと思っております。

群馬高教組は群馬県の公立の高校で働く教職員のための労働組合です。労働組合ですから、働く者として、自分たちの賃金や権利、待遇の向上のために、同じ群馬県内の公立の小学校・中学校の先生方や県庁の職員の皆さんと力を合わせ、そして県内の公務員以外の働く方々とも、さらには県外で働く方々とも力を合わせて活動しています。

しかし同時に教職員の組合ですから、教職員として、どうしたら子どもたちにより良い教育を施し、みんなが幸せになれるか、また教職員として、誇りとやりがいを持てる仕事とはどのようなものか、そのために学校はどうあるべきかとも考え、改善に取り組んでいます。

皆さんは、学校の役割はどのようなものであると考えますか。私は学校には大きく二つの役割があると考えています。

一つは「生徒の自己実現を支援すること」。これは具体的に言えば、生徒のさまざまな「進路希望」（将来何になりたいとかどんな大学に行きたいとか）をかなえる手助けをすることです。これは比較的すぐにイメージできると思います。これが一つ。

そしてもう一つは「市民を育てること」です。市民という言い方は、ある意味手垢のついた言葉で、広がりのある概念であると同時に、特定のイメージを持つものかもしれませんが、私はシンプルに「自分の属する社会（家庭、学校、職場、地域、都道府県、国、世界）をより良いものにしようと、考え、発言し、行動する人」と定義します。

ここで「より良い社会とはどのようなものか」という話をしはじめると本当に長くなってしまいますし、それは時代や状況によっても変化するものだとも思いますが、現代において目指すべき一つの姿は、間違いなく「持続可能な社会」だと思います。当面はこの「持続可能な社会の形成者として、考え、発言し、行動する人を育てること」を目指す必要があると考えます。

この「市民を育てる」とは、言われてみれば何も特別なことではないはずですが、「実際の教育現場でこれがきちんとされているか」と問われると、正直、答えに窮してしまうのではないかと思います。なぜそうなのか、その話をしはじめるとこれもまた長くなりますのでここではしませんが、その市民を育てるためには、少なくとも「教員自身も考え、発言し、行動できなくては」と思い、私は組合員として活動しています。

そしてその「より良い社会や教育について考える活動」の大きな柱として、群馬高教組は、教職員や広く県民の皆さんと教育について語り合う場として、毎年2月11日に、このようなつどいを催しております。高教組の古い呼び名で呼ぶなら、今年のこの会は「第68次群馬高教組教育研究集会」であり、たいへん歴史のあるものです。しかし残念ながら、ここしばらくは一般の方の参加はほとんどなく、組合員でない教職員の参加もなく、群馬高教組の組合員がメインの集会となっていました。

けれども内容的にはとても充実したものです。昨年は新型コロナの感染拡大のため、オンラインの、世代別組合員代表による「教育の未来について語る」シンポジウムでしたが、その前の内容をざっと列挙しますと、早稲田大学准教授・スポーツ社会学の中澤篤史さんと部活動について考え、ハレルワのメンバーとLGBTQ、ダイバシティ&インクルージョンについて考え、名古屋大学准教授・教育社会学の内田良さんと教職員の働き方について考え（この時は前群馬県教育長笠原寛さんの参加がありました）、名古屋大学大学院教授・教育行政学の中嶋哲彦さんと市民社会について考え、18歳選挙権を前に、SEALDsのメンバーや現役高校生と「民主主義」について考えました。

また、来年度から高校では年次進行で新しい学習指導要領が導入されますが、そこに示された「主体的で対話的で深い学び」いわゆるアクティブラーニングについては、2009年に教育学者の佐藤学さん「協働学習」や「学びの共同体」を取り上げる過程で学び、その時から取り組みを始めています。ですから群馬高教組では、もう10年以上も前から新学習指導要領の内容を先取りして、教育の未来について考え続けているのです。

そんな「ぐんま教育のつどい」に今回、あの「人新世の『資本論』」の著者である斎藤幸平さんをお招きできたことを大変嬉しく思います。

私はこの本を読んだ時の「驚き」を今でもよく覚えています。

マルクスが再評価されていることは、さまざまな別の本を読んで知ってはいましたが、その再評価とは、マルクスの思考方法や社会への対し方についてのものであるというのが私の認識でした。

しかしこの本ではまず冒頭にマルクスの言葉を引いた「SDGsは『大衆のアヘンである！』という非常に挑発的な見出しを置き、マルクスの考えた内容そのものについてストレートに再評価し、さらに資本主義をストレートに批判するものでした。それは私のような、現在の行きすぎた資本主義に違和感を持ち続けてきた者でさえたじろぐほどの、まっすぐな主張であり、正直、「大丈夫なのか」と思ったほどです。

けれども読み進めていくうちに、斎藤さんの主張は、今まできちんと読まれてこなかったマルクスの残した膨大なノートを読み解き、その上に立って展開された確かなものであり、（斎藤さんの「大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝」を読むとさらによくわかります）マルクスの思考の新たな側面、「エコロジカルな資本主義批判」に目を向けているのだとわかってきました。そして改めて、マルクスの思考方法と思想の卓越性が照射されてくるのを感じました。そしてさらに、それが単なる机上の空論ではなく、現実にヨーロッパからアフリカ、南米、アジアにまで広がる注目すべき「フィアレス・シティ」のネットワークの理論的支柱ともなるとわかってきた時、私は何か目頭が熱くなってくるのを感じました。

中学生や高校生であった時、新しい本を読むたびに、自分が今まで知らなかった世界がそこに広がっている事実を突きつけられ、驚きながらもワクワクした、あの時の感じを久しぶりに味わうことができたのです。

その後、斎藤さんが関わる本をいくつか読みましたが、特にこの「資本主義の終わりか、人間の終わりか？ 未来への大分岐」では、斎藤さんは、マイケル・ハート、マルクス・ガブリエル、ポール・メイソンといった気鋭の哲学者、経済ジャーナリストとがっぷり四つに組み、全く臆することなく鋭い質問を投げかけ、持論をぶつけ、対話を繰り返しています。

ここで語られている内容は大変幅広く深いもので、とても短時間で紹介することはできませんし、この後の斎藤さんの講演でご自身からお話があると思いますので、私は何も言いませんが、私は、斎藤さんの主張の内容に大変興味を持つと同時に、「どうしたらこのような若者が育つのだろう」とも考え始めました。若者と言っても失礼ですが、実際斎藤さんは35歳になったばかりです。ですから、斎藤さんがもし群馬で生まれ育っていたならば、私が斎藤さんに国語の授業をしていたという可能性もあったはずなのです。

けれども果たして、今の、あるいはこれからの群馬の公立の高校で、思いて学び、学びて思い、人と語れば鋭く質問し、遠慮なく反論できる斎藤さんのような「若者を育てる」、より正確に言うなら「若者が育つ」ことができるのか、非常に心もとなく感じます。

今日は現役の群馬の高校生の参加もある中で、こんなことを言うのは本当に申し訳ないのですが、それが正直な私の思いです。

私の37年の教員生活で思うのは、生徒は、教員には全ては計り知ることができない大きな可能性を持っていて、適切な刺激と環境を与えられるなら、「勝手に伸びてゆく」ということです。勝手に伸びて、教師の想像と教師自身をも軽々と超えてゆきます。まさに「青は藍より出でて藍より青し」です。私はそういう生徒に何人も出会ってきました。それは教員としての喜びでもありません。

けれども今はあまりにもさまざまな方面からの管理統制が厳しく、時間的な余裕もなく、一人ひとりの生徒を見て、それぞれの生徒にあった、適切な刺激と環境を与えることができにくくなっていると感じます。そして教師自身が自由にものを考え、発言し、行動することもやりづらくなっています。発言の機会も激減しています。

教師の自由が奪われると、生徒の自由が失われます。

そして「これこそが最高の方法」と、良かれと思いながらも、一方的・画一的に与えられたものが、その生徒にとって不適切な刺激や環境であった場合、「助長」という言葉の原義のように、根を引き抜かれ、しおれさせられてしまうこともありますし、「角を矯めて牛を殺す」という結果にもなります。

斎藤さんは、自由な校風で知られる東京の私立、芝高校ご出身で、高校卒業後は東京大学理科二類に進まれ、3ヶ月在籍したのち渡米し、ニューイングランドのリトル・スリーの一角、ウェズリアン大学でリベラル・アーツを身につけ、ドイツのベルリン自由大学で修士課程を終え、フンボルト大学で博士号を取得されました。そして2018年、マルクス研究界最高峰、極めて権威のある「ドイッチャー記念賞」を日本人初、31歳、歴代最年少で受賞されました。まさに、輝くような経歴です。

「自由な高校で学び、早くから日本を出たことが今の斎藤さんにつながった」というのが私の仮説です。この仮説がもし正しいとするなら日本の教育にとっては悲しむべきことですが、私の仮説が正しいかどうか。この辺りも今日お伺いできればと考えております。

いずれにせよ、今日は「教育のつどい」ですから、まずは斎藤さんのお考えをしっかりとお聴きした上で、「これからの教育や社会」についてみんなで考えていきたいと思えます。

かつてこのような会は、「ああ、いい先生が来てくれて、いい話が聴けたねえ」と満足して終わることが多かったように思います。けれども今日お話ししてくださる斎藤さんは、それでは満足してはくださらないでしょう。

斎藤さんは答えを示してくれるためにここにおられるのではない。

私たちがしっかりとモノを考えるための大切なヒントを示してくれるのだ。

そのヒントをもらったら、あとは自分たちでしっかり考えよう。

今日のつどいが、そんな会になることを望みながら私の話を終わりにします。